法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

琉歌の表現研究 ： 和歌やオモロとの比較

ウルバノヴァー, ヤナ / URBANOVA, Jana

(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
486
(発行年 / Year)
2014-03-24
(学位授与番号 / Degree Number)
32675甲第326号
(学位授与年月日 / Date of Granted)
2014-03-24
(学位名 / Degree Name)
博士(文学)
(学位授与機関 / Degree Grantor)
法政大学 (Hosei University)
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010261

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	URBANOVA　Jana
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	第 540 号
学位授与の日付	2014 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査　教授　間宮　厚司
	副査　教授　加藤　昌嘉
	副査　法政大学文学部兼任講師　田中　寛美

琉歌の表現研究―和歌やオモロとの比較―

【１．はじめに】

本論文は、琉歌（和歌に対して琉球風の短歌の意で、八・八･八･六形式の抒情的歌謡）が、沖縄最古の歌謡集『おもろさうし』(1531～1623 年編纂）を母体にして生まれたのか、和歌（勅撰和歌集等）の影響を受けて成立したのかという、これまでにも議論されてきた問題について、新たな視点を導入しつつ、琉歌の形成過程について論究したものである。

ヤナ氏は、この問題を解決するために、琉歌の表現をオモロや和歌の表現と徹底的に比較した。その結果、言語表現上、オモロと和歌、どちらとの関係がより大きいのかという点を地道に検証することで、実証的に問題の解明に努めたものである。

この論文は、2010 年度のヤナ氏の修士論文『琉歌と和歌の表現研究』以降、学術雑誌に発表した琉歌の表現に関する既発表の論文４本（うち査読付き３本）と未発表の論文１本をベース（本論文「旧稿との関係一覧」参照）に、加筆・修正を加えてまとめたもので、全体の構成（目次）は以下の通りである。

序章

第１章　琉歌、和歌やオモロの表現比較研究―「面影」をめぐって―

１．はじめに

２．琉歌と和歌における「面影」と呼応する動詞

２－１．琉歌の「面影」と呼応する動詞

２－２．和歌の「面影」と呼応する動詞

２－３．琉歌と和歌における「面影」と呼応する動詞の比較

３．「面影→立つ」を詠んだ琉歌、和歌やオモロの類似の句

３－１．和歌の「面影ぞ立つ」と琉歌の「面影ど立ちゆる」

３－２．「面影ぞ立つ」と「面影ど立ちゆる」を含んだ和歌と琉歌の特徴

３－３．和歌の「見し面影の　立たぬ日ぞなき」と琉歌の「馴れし面影の　立たぬ

日やさいなめ」
３－４．和歌の「見し」と琉歌の「馴れし」
４．「面影」を詠んだ和歌の改作琉歌
５．「面影」を詠んだ琉歌と和歌の特徴
５－１．和歌の「添ふ」と琉歌の「まさる」、「すがる」
５－２．和歌の「見る／見ゆ」と琉歌の「目の緒さがて」
６．おわりに
第２章　琉歌と和歌の表現比較研究―「影」をめぐって―
１．はじめに
２．琉歌と和歌における「影」と呼応する動詞
３．「影」を詠み込んだ和歌の改作琉歌
４．「影」を詠んだ琉歌と和歌において用いられる共通の表現（句）
４－１．琉歌と和歌における「さやかに照る月の影」
４－２．琉歌と和歌における「四方に照る月の影」
４－３．琉歌と和歌における「名に立つ月の影」
５．おわりに
第３章　琉歌の季節語（春夏秋冬）をめぐって―オモロや和歌との表現比較―
１．はじめに
２．琉歌、オモロや和歌における季節語の使用率
３．琉歌、オモロや和歌における季節語と動詞との組合せについて
４．「春」の歌について
５．「夏」の歌について
６．「秋」の歌について
７．「冬」の歌について
８．おわりに
第４章　『標音評釈琉歌全集』の改作琉歌について
１．はじめに
２．『琉歌全集』の「節組の部」の改作琉歌
３．『琉歌全集』の「吟詠の部」の改作琉歌
４．改作琉歌やその元となった和歌のまとめ
５．和歌から琉歌への流れ込みに関する一考察
６．おわりに
第５章　オモロと琉歌における「大和」のイメージ
１．はじめに
２．オモロにおける「大和」のイメージ
３．琉歌における「大和」のイメージ

４．「大和」のイメージをオモロと琉歌で比較する

５．おわりに

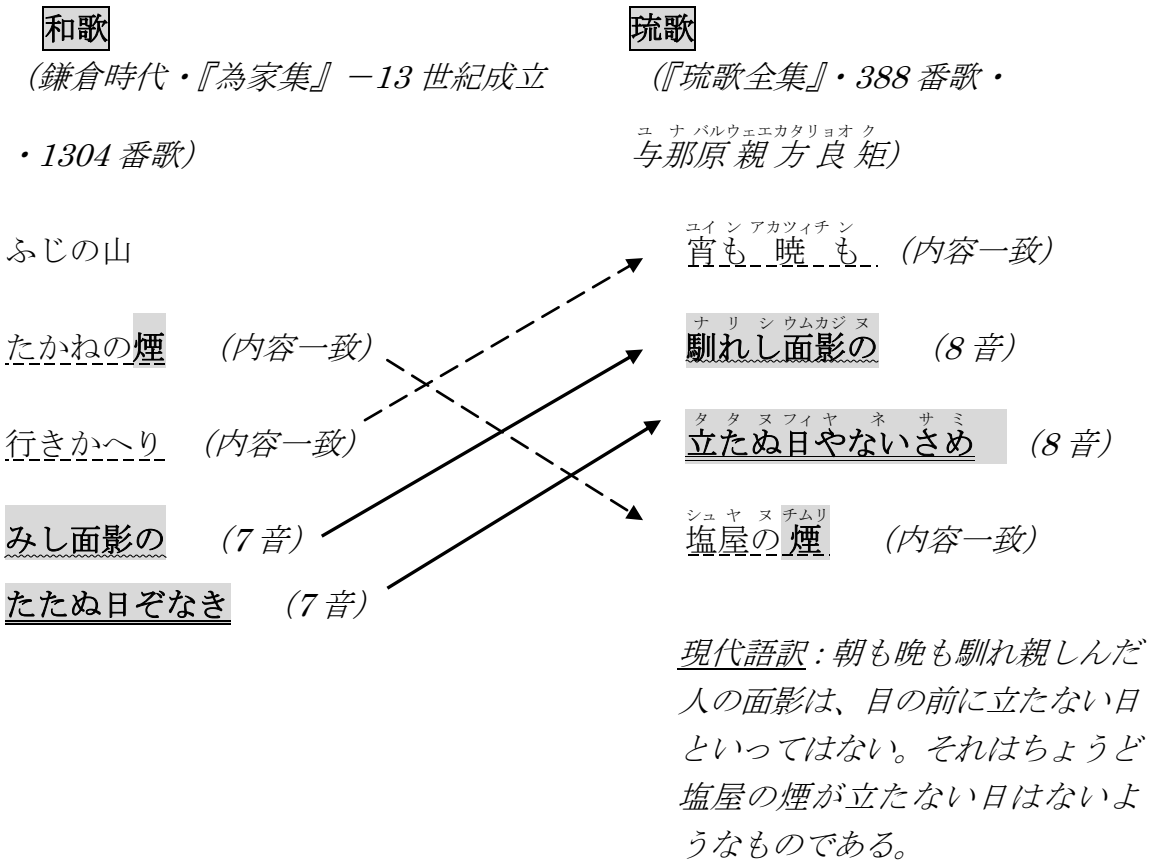
終章

参考文献　　旧稿との関係一覧　　資料編

【２．本論文の内容と特色】

本論文は、計五章と資料篇から成る。

「第１章　琉歌、和歌やオモロの表現比較研究―「面影」をめぐって―」は、琉歌の中で「面影」と呼応する動詞を調査した結果、動詞「立つ」が最も多く、この「面影→立つ」は和歌でも同様に最多であることを確認したもの。そこから和歌を琉歌へ改めた改作琉歌を以下のように図式的に示すことで、計 11 首の表現の対応関係を子細に検証する。



上の例では、和歌の第４句「みし面影の」（７音）と第５句「たたぬ日ぞなき」（７音）を、琉歌の第２句「馴れし面影の」（８音）と第３句「立たぬ日やないさめ」（８音）に、改める形で改作したものだと説明する。また、琉歌の「馴れし」は、オモロには見られず、和歌に見られる表現であるところから、琉歌は和歌の表現を踏まえたものであると論じる。

「第２章　琉歌と和歌の表現比較研究―「影」をめぐって―」は、第 1 章の「面影」論を

発展させ、「影」という語を詠み込んだ琉歌と和歌について調査を行ったもの。その結果、「影」を詠み込んだ琉歌 60 首の中に、和歌の改作琉歌は 14 首見られ、23%に及んでいることを明らかにする。そして、これら 14 首のうち、平安時代初出の和歌を改作した琉歌は 5 首、鎌倉時代の和歌を元にした琉歌は 8 首、室町時代の和歌を改作した琉歌は 1 首あると指摘する。第 1 章に引き続き、本章においても琉歌は和歌からの影響が大きいことを論証している。なお、本章において指摘された改作琉歌の例を 1 首、次に示しておく。

和歌	琉歌
『後拾遺和歌集』(1162) *(歌人：和泉式部)*	*『琉歌全集』(2356)、* *『古今琉歌集』(575)* *(歌人：読人しらず)*
ものおもへば	胸に物思めば　(ンニニ　ムヌ　ウミバ)
さはのほたるを(も)	蛍火の影も　(フタルビヌ　カジン)
わがみより	わが身より出ぢる　(ワガミユリ　うジル)
あくがれにける(いづる)	光ともて　(フィカリ　トゥムティ)
たまかとぞみる	

現代語訳：胸に物を思い焦がれていると、蛍の火の影を見ても、我が身から出る光ではないかと思うほどである。それほど胸は燃えている心持ちだ。

「第３章　琉歌の季節語（春夏秋冬）をめぐって―オモロや和歌との表現比較―」では、季節語をめぐる考察を行い、以下の三点を指摘する。一つ目は、オモロに見られる季節語は「夏・冬・若夏・うりずん」のみであるのに対して、琉歌の場合はそれらの季節語だけでなく、和歌と同様に「春」や「秋」も詠み込んでいる点。二つ目は、季節語を含む表現について見ると、沖縄独自の季節語「若夏」や「うりずん」と呼応する動詞は、オモロと琉歌で異なるのに対し、和歌と琉歌は季節語と動詞や名詞の組み合わせの点で共通表現が目立ち、とりわけ「春」と「夏」の歌で、その傾向が強いという点。三つ目は、季節語を詠み込んだ琉歌と和歌の句ごとの調査を行った結果、過半数は類似しており、「春夏秋冬」を詠み込んだ琉歌 415 首中、43 首もの改作琉歌を発見できた点。要するに、季節語の観点から調査した本章においても、琉歌はオモロではなく和歌からの影響が大きいことを実証している。以下に、「春夏秋冬」の改作琉歌の中から、それぞれ一首ずつ示す。

「春」

和歌	琉歌
『新古今和歌集』(68)	*『琉歌全集』(1459)*
(歌人：凡河内躬恒)	*(歌人：高良睦輝)*
春雨の	降ゆる春雨の　(フユル　ハルサミヌ)
ふりそめしより	染めなしがしちやら (スミナシガ　シチャラ)
青柳の	庭の糸柳の　(ニワヌ　イトゥヤジヌ)
いとのみどりぞ	色のまさて　(イルヌ　マサティ)
いろまさりける	

現代語訳：春雨が染めなしたのであろうか、庭の糸柳の色が、一段と緑の色が濃くなったようである。

「夏」

和歌	琉歌
『後撰和歌集』(209)	*『琉歌全集』(2320)*
(読み人：わらは)	*(歌人：安仁屋政清 (アンナ　セイセイ)*
つつめども	つつでつつまらぬ (ツィツィディ　ツィツィマラヌ)
かくれぬ物は	哀れ夏虫の　(アワリ　ナツィムシヌ)
夏虫の	身にあまるほどの (ミニアマル　フドゥヌ)
身よりあまれる	思やれば (ウムイ　ヤリバ)
思ひなりけり	

現代語訳：自分の胸中の思いは、つつもうとしてもつつみきれるものではない。それは螢が身を焦がすほど思いこがれてその光が他にもわかるようなものだ。隠そうとしても、隠しきれるものではない。

「秋」

和歌	琉歌
『古今和歌集』(215)	*『琉歌大成』(4167)*
(歌人：猿丸大夫)	*(歌人：故津波古親雲上)*
[註：歌人は、藤原定家の『百人一首』に依る]	
おく山に	深山住むならひや (ミヤマ　スィム　ナレヤ)
もみぢふみわけ	紅葉ふみわけて (ムミジ　フミワキティ)
なく鹿の	鹿の声聞きど (シカヌ　クヰ　チチドゥ)
こゑきく時ぞ	秋や知ゆる　(アチヤ　シユル)
秋は悲しき	

現代語訳：深山に住む者は、紅葉を踏

み分けて鳴く鹿の声を聞いて、秋を知ることができる。

「冬」

和歌	琉歌
『嘉元百首』(1247)	*『琉歌全集』(1579)*
(歌人：不明)	*(歌人：読人しらず)*
浅茅生の	白露の玉と（シラツィユヌ　タマトゥ）
つゆのやどりも	今日や初霜の（キユヤ　ハツィシムヌ）
けさよりは	草におきかはて（クサニ　ウチカワティ）
しもおきかへて	冬や来ちやる　（フユヤ　チチャル）
冬は来にけり	

現代語訳：今日は白露の玉と初霜が、草におき代って、早くも冬が来てしまった。

「第４章 『標音評釈琉歌全集』の改作琉歌について」では、第１～３章の改作琉歌に加え、『標音評釈琉歌全集』の「節組の部」と「吟詠の部」を対象に新たな改作琉歌を指摘する。考察の結果、オモロの改作琉歌は 3 首だけであるのに対し、和歌の改作琉歌は 93 首もあることを指摘する（下に一首示す)。また、改作された和歌の作者傾向についても言及する。

和歌	琉歌
『鳥の迹』(795)	*『琉歌全集』(37)*
(歌人：不明)	*(歌人：読人しらず)*
海山を	海山よ越えて　（ウミヤマユ　クイティ）
越えてみつぎを	みつぎ納めても（ミツィジ　ヲゥサミティン）
はこぶにも	道直くあれば　（ミチ　スィグク　アリバ）
道ある御代は	近くなゆさ　（チカク　ナユサ）
遠しともせず	

現代語訳：海山を越えて租税を納めるということは苦しいことだが、人の道も政の道も真直で正しけれ ば、どんな遠い道でも近いように思われる。

なお、『標音評釈琉歌全集』は全 3000 首を載録しているので、今後は改作琉歌が、どのくらい見出せるのか、引き続き精査する必要がある。本章は、その中間報告である。

「第５章　オモロと琉歌における「大和」のイメージ」では、オモロと琉歌が「大和」を

どのようなイメージで歌い上げているのかという視点で考察したもの。調査の結果、「大和」を詠み込んだオモロと琉歌がほぼ同数であることを確かめた上で、オモロの場合は「大和」への反感や競争意識を表現したものが過半数を占めているのに対して、琉歌には「大和」へ反感を抱く歌は１首しか見られず、「大和」を賛美したり航海の安全を喜んだりするなど個人的な感情を歌う中で「大和」を詠み込むという、明確な相違点を指摘する。こうした違いの生じた理由については、オモロが主にフォーマルな儀式の場で歌われ、群れの発想を表現するのに対し、琉歌はインフォーマルな個人の間で歌われ、個人の発想を表現している点にあると述べる。加えて、1609 年の薩摩藩の琉球入り直後に編纂されたオモロと、約１世紀後の琉歌という時代差も一因かと推察する。なお、本章だけは第１~4 章において指摘してきた改作琉歌を示す章ではないので、やや異質な章との印象を与える。しかし、本論文の『琉歌の表現研究―和歌やオモロとの比較―』という題目から外れてはいない。

［３．本論文に対する総合的評価］

以上、本論文の内容と特色を各章ごとにまとめたが、琉歌が形成される過程でオモロと和歌のどちらの影響を強く受けているかという問題に対して、ヤナ氏が採った方法は極めて正攻法なもので終始一貫しており、琉歌の研究に一石を投じるものとなっている。いずれの論考も全例を集めて単語の使用状況・語義・表現の類型等、様々な観点から考察し、未だ調査の及んでいない膨大な歌を対象として着実に考察することで、これまで本格的に論じられずに、断片的な指摘に過ぎなかった改作琉歌を多数見出した点は、この問題に関する従来の水準を明らかに超える斬新な研究として独自の成果を上げた高水準のものと認められる。すなわち、琉歌はオモロよりも表現面からは和歌との共通点が多く見られることを明快に提示するとともに、改作琉歌の単なる指摘に留まらず、琉歌の文学作品としての質にも十分配慮しながら、豊かな文学的鑑賞を丁寧に試みている。

本論文により、琉歌は和歌の影響を受けつつ形成されてきたことが、数多くの改作琉歌の存在によって判明した。今後は和歌だけでなく、物語や日記の表現との比較も積極的に進め、中世・近世の歌謡（『閑吟集』『宗安小歌集』等）や謡曲（能楽）との関係も視野に入れ調査してほしい。また、改作琉歌の元になる和歌は『明題和歌全集』『類題和歌集』等の歌集から学んだとヤナ氏は推考するが、それらが流布した時代を考慮しつつ和歌が琉歌に改作された年代の確定と、さらにどういう人達が何のために改作琉歌を作成するに至ったのか、という歴史的背景の解明についても考究を重ねる必要があろう。

［４．結論］

審査小委員会は、ウルバノヴァー・ヤナ（URBANOVA　Jana）氏の学位請求論文『琉歌の表現研究―和歌やオモロとの比較―』を上記のように評価し、本論文提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するとの結論に達した。

以上